



〈国民生活に密着していない中央官庁が、現実に対応していない法律を盾にとって立ちほだかるから、あちこちに矛盾が出てくる〉
 コロナ禍で実感したのは、まさにこの通りのことでした。医療も経済も市民感情などお構いなし、一部の人間の金もうけのために政策があると知り絶望した3年でした。矛盾だらけの世の中です。
 しかしこの言葉の記された本が出版されたのは、実は1991年のこと。『郵(ひな)の論理』(光文社刊)というタイトルです。郵とは「ひなびてる」の「ひな」であり、都会から離れた地という意味があります。著者は当時、熊本県知事を辞める直前の細川護熙氏と、証券会社大手メリルリンチ副社長から転身し、現役の出雲市長であった岩國哲人氏。東京一極集中の政治を批判し、地方から日本を変えよと持論を展開。

327 元出雲市長 岩國哲人



優しさを知った新聞少年

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビング・ウィルの啓発を行う。映画『痛くない死に方』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした傍ら、ときどき音楽ライブも。

この著者の一人である岩國哲人さんが、米国シカゴの病院で10月6日に死去されました。享年87。死因は明らかにされていませんが、昨年末から同病院に入院していたとのこと。
 出雲市長になった岩國さんは、

「行政は最大のサービス産業」というモットーを掲げ、土日の行政サービスの開始、出雲駅伝や日本最大の木造ドーム「出雲ドーム」などを発案。その手腕が話題を呼びましたが、2期目の途中で市長を退任し東京都知事選へ立候補して落選(青島幸男氏が当選)。その後は国政に出て、衆議院議員を4期務めました。2009年に政界を引退しています。

岩國さんの著書で、僕がもう一冊印象に残っている本があります。「おばあさんの しんぶん」(講談社)という絵本です。この原作者が岩國さんで、少年時代の

実験が描かれています。

岩國さんは小学校1年生の時に父親を亡くしました。家計を助けるため、5年生の時から新聞配達を始めたそうです。しかし岩國家では新聞を購読する余裕はなかった。そのうち岩國少年は、配達先の老夫婦のお家で自分の配った新聞を読ませてもらうようになり、おばあさん一人になっても、岩國少年は変わらず新聞を読ませてもらう、お茶まで出してもらったそうです。おじいさんの死から3年後、おばあさんも死去。葬儀に参列したときにはじめて、実はおばあさんは字が読めなかったと知ります。そう、岩國少年のために新聞を取り続けてくれたのでした。

この絵本を読んだとき、涙が止まりませんでした。なぜなら僕自身もかつて新聞配達少年だったから。貧しい頃に誰かに優しくされた経験は、その人を強く、優しい人になります。今の国会議員全員が、この絵本を読むべきでしょう。